

3. 平成 21 年度の研究

- ・ 研究テーマ「個別の教育的ニーズに応じた特別支援の在り方」
- ・ 通学高等部の研究テーマ「発達障害のある生徒への具体的な支援の在り方」

(1) 研究の概要

ア 作業学習授業参観

5月中旬に作業学習の授業参観週間（2週間）を設定

イ 教育部研

作業学習の授業見学を受けて、通学高等部の作業学習の在り方を話し合った。

(ア) 5月29日実施分

平成 21 年度通学高等部教育部研（作業学習について）

1. 教育課程での作業学習の位置づけ

- ・ 学習指導要領に定められた、領域・教科を合わせた指導に位置づけられる。
- ・ 「作業活動を学習活動の中心に据え総合的に学習するものであり、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立を目指し、生活する力を高めることを意図するもの」

2. 作業学習を見学して感じたこと

3. 日頃から、作業学習について感じていること

4. 通学高等部で従前より大切にしてきた事項の指導

A) 元気なあいさつや返事ができる。

作業中には、元気なあいさつや返事ができるように、いろいろな場面で細かくそしてていねいに指導してきた事柄である。とくに目上の人に対する返事や生徒同士での話し方や連絡時の話し方も敬語を基本に話せるように指導している。

B) 素直な態度、やる気を見せる。

指示に対しては素直な態度で聞く姿勢を常に求めてきた。またやる気を見せるためには、作業中のきびきびとした動きや返事や受け答え方もていねいに指導してきている。

(イ) 3月3日実施分

那波（なば）先生を迎えて

通学高等部の開校以来、通学高等部の教育課程を作り上げてきた那波先生を講師に迎えて、トークを中心に作業学習を語ってもらう。

1. 通学高等部設置時の構想・・・作業学習の位置づけ

2. 作業学習を開設時に大切にしてきたこと

3. 特に就労を意識した作業学習での留意事項は？

4. 生徒の実態に応じた手だてについては？

5. 開設 20 年を迎えた、現在の作業学習に望むこと

イメージすること・・・まねる、気持ちを向ける。

感覚統合について・・・複数の情報を入力して、必要な物だけを選び取り組み合わせる活動構造化・・・場や情報を整理して提示することで、理解しやすくなる。

ウ 研究授業

1 学期 3 年生 総合的な学習の時間「リトレーニング」

中心指導：野本恭寛

2 学期 2 年生 職業「アルプラ販売事前学習」

中心指導：松本浩明

エ 教育課程研究

平成 22 年度より実施する教育課程の改編にともなう研究

(2) 研究授業を振り返って

ア 1学期3年研究授業「リトレーニング」(H21/6/18)

- ・ 3年生の生徒は、メタ認知の能力が低いために、周囲からどのように思われているかが分からずに、空気を読めない言動もよく見られる。そこで、リトレーニングの取組では、周りの環境を自分自身でよく見て判断し、その環境に合わせた行動が求められる場面を設定して、環境に合わせた行動を行うトレーニングも盛り込んでいる。
- ・ リトレーニングの取組は以上のような実態から、トレーニング的な内容のほかに、ゲーム的な内容も入れて生徒たちも楽しみながら各種のスキルを身につけさせたいと考えている。

○リトレーニングの取組の経過

昨年より取り組んできたリトレーニングとは、**自閉症などの発達障害の特性として、いろいろな姿勢変換を伴う動きが苦手であったり、体幹のバランス感覚が苦手な生徒が多い。**そこで**自分の体を自由に使う柔軟性や調整力をつけるためのトレーニングを取り入れるのをきっかけにした。**はじめは「片足で立ってバランスをとる」「ペアで体を動かす」「リラックスする姿勢」などを体験させる場面が多く、簡単なゲーム形式で楽しく取り組めるように工夫をした。

しばらく取り組むうちにペアを意識したり、18名全体で行動する場面を設定することで、「**ペアや周囲の動きに対して自分の動きを調整して活動する**」という発想が出てきて、その活動をリトレーニングと呼ぶようになった。

さらに、**リトミック運動で体全体を動かす活動を取り入れたりと、正しく好ましい姿勢や体の動きを身につけるように間違った学習(誤学習)を正していく活動も取り入れ**、現在の「リトレーニング」となっている。

○発達障害のある生徒に対する視点

(ア) ストレッチ運動・ボールパス

発達障害のある生徒は、全般としてバランスが悪く動きがぎこちない生徒が多くみられる。また、自分ひとりで動くだけでなく、**ペアの生徒と一緒に組んで体全体を動かし、力の入れ具合や方向などを調整する場面を設定している。ペアの相手を替えることで、新しい関係を作り、バランスよく力の量や方向を調整する活動となる。**ボールパスの活動では、ボールを仲介にして相手が受け取りやすいようにバスケットボールを渡す動きをした。**対面する相手を意識する場面を設定し、具体的な体の動きをすることで関係調整ができるように留意をした。**

1対1の関係で相手のことを考えた動きが出来ることが、発達障害の生徒たちには必要不可欠な活動と考えるので、この一年間積極的に取り入れてきた。

(イ) 集合隊型と行進

縦列と横列を常に意識しながら自分のいるべき場所を動きながら把握し、調整する活動を取り入れた。前後左右の生徒との間隔の開け方に注目し、縦の列の線・横の列の線を意識しながら、さらに行進の動きを加えて活動をした。**行動訓練ではなく、ゲームをするような感覚で楽しく活動するように留意し、「左向け左」「右向け右」の号令に合わせて行進したり、手の振りや膝の高さなども周りに合わせる調整活動**に取り組んだ。

(ウ) 発達障害のある生徒にとって、リトレーニングの活動そのものが支援であること

指導者の言葉による指示だけでなく、具体的な体の動きを見て同じ動きをする場面を設定した。活動する時には、二人一組になりペアの生徒と同じ動きをしたり、18名の生徒全体のなかで周りの動きを見ながら自分の動きを合わせる活動を取り入れることが多かった。つまり「**ペアの生徒と力やバランスを調整して活動する**」場面、18名の生徒による集団行動が「**まわりの動きを見て、今自分はどのように動いたらよいか**」を判断する人間関係の調整につながると考えている。

「**空気を読む。**」「**相手の立場を考える。**」ことが苦手な生徒にとっては、体全体を使ったこれらの取組が適していると考えられる。

○指導案より(抜粋)

1. 単元設定の理由

(略) 実際に販売活動を行うことによって働くことの大切さを知り、働くことへの意欲を育てるとともに、接客の学習活動を通して、人とのコミュニケーションのとり方や、人への思いやり等、対人関係における礼儀やマナーについて学習する場面を設定した。卒業後に接客業に就職する生徒は、多くはないが働く上での大切にしたい事柄は同じであると考へ指導したい。

それをふまえ、今回の販売学習では生徒の活動の幅を広げるために、より実践的な接客場面を想定した学習内容を設定した。

2. 児童生徒の実態

本グループは、2年生男子13名・女子3名の集団で、全体的な発達の力では7～10才ぐらいにあり、会話については、場に応じた言葉遣いができるようになってきている。集団としてのまとまりも昨年に比べて向上している。

(略) その一方で、同じ活動を繰り返すと集中力が落ちる。また、活動を順序立てて取り組むことが苦手である。

このような実態から、授業の最初に流れを説明することや視覚的な支援を用いることで集中できる環境をつくりたい。

また生徒一人一人に具体的な役割と目標があれば、それにむかって努力する姿勢があるので販売学習においてもその力を発揮できる環境を設定したい。(略)

このような実態をふまえて、生徒にアルプラザ城陽販売当日の見通しをもたせスムーズに活動できるように授業を展開させたい。

3. 単元目標

- ・接客の学習活動を通じて、人とのコミュニケーションのとり方や、人への思いやり等、対人関係における礼儀やマナーについて学習する。
- ・アルプラザ販売の接客への見通しをもたせ、販売学習への意欲づけを行う。
- ・身だしなみを整えることの意味を理解させ日常的に意識させる。

4. 個別の目標

生徒名	生徒の実態	個別の単元目標	手だて
A (PDD)	<ul style="list-style-type: none"> ・説明の一部分だけを聞いて、自分の解釈でものごとを進めてしまう傾向がある。 やり方を理解すると時間はかかるが、正確にできるようになってきている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・周囲の状況を見て適切な接客態度で販売できる。 ・わからないことを曖昧にしない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習において、販売の手引きに書かれたことを基本に、友だちや指導者と接客態度の練習を繰り返し行う。 ・接客のルールをイラスト・映像などを使って理解できるように支援する。
B (PDD)	<ul style="list-style-type: none"> ・抽象的な言葉や同時に2つ以上の指示の理解は難しい時が多いが、理解できない時に質問をする力がついてきている。 ・指示内容が理解できれば、最後まで責任を持って取り組む根気強さがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・販売用語を覚え、タイミングよく発言する。 ・指示がわからない時に質問できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・接客基本トークマニュアルを作成し、練習する。 ・ヘルプの出し方を決めておく。 ・接客のルールをイラスト・映像などを使って理解できるように支援する。

○ 事後研より (H21/11/24)

中心指導者より

- ・ A・B・C (ともに発達障害) に視点を当てた指導で、この3人が理解できれば他の生徒にも分かるという実態がある。
- ・ 視覚支援を意識的にいくつか入れた。(板書・VTR・笑顔) 特にVTRについては、○バージョンと×バージョンを用意した。

① 販売の見本としてビデオを活用したこと

- ・ ビデオを使って、販売の良いパターンと悪いパターンを見ることで、ロールプレイの時に生徒がよくわかって活動できていた。見る視点を始めに具体的に伝えることで、よりわかりやすくなる。
- ・ 視覚的な支援があることで、伝えたいことがきちんと伝わっていた。特にAの発言(笑顔など)が松本先生のトーンがあがり喜びになっていた。

② 販売活動のロールプレイについて

- ・ Aは、具体的な言葉かけでないとわからない。わからないことでイライラしたり表情が変わったりという部分はないので、取り組んだ後に確認してきた。
- ・ Aは、笑顔を作ることに気持ちがいっていたのでBパターンの言葉の方がおろそかになっていた。
- ・ 2年にもDやEのように課題のある生徒はいるが、具体的に示すことで言えるようになることもある。
- ・ 授業のメインは、展開2のロールプレイのところが大切で、今日は生徒たちが少し遊びに入っていた。例えば、クラス8人を4人ずつ、客と判定員に分けて行うなどの工夫も必要だったのかと思う。
- ・ 視覚的な教材が使われてよかったし、同じものを同じようにみれることが生徒には良かった。プロの映像は、笑顔の幅(段階)があるので、自閉の生徒には、具体的な指示がいる。

③ 接客基本トークマニュアル・販売マナーの手だて

☆接客基本トーク Bパターン

お客様「これください」

販売員「ありがとうございます。500円です。」

お客様「1000円をお願いします。」

販売員「少々、お待ちください。」

販売員「お待たせしました。おつりが500円です。」

お客様「ありがとう。」

販売時のマナー

○いまからビデオを見てもらいます。販売員としてふさわしい態度を確認しましょう。
ビデオをみてよくないと思う態度を書いてみましょう。次に、それに対する正しい態度を書いてみましょう。

ケース1

(よくない態度)	→	(正しい態度)
<div style="border: 1px solid gray; border-radius: 15px; height: 60px; width: 100%;"></div>		<div style="border: 1px solid gray; border-radius: 15px; height: 60px; width: 100%;"></div>

(3) 1年間のまとめ

通学高等部の教育課程は開校以来、知的障害を対象とした教育課程を編成してきたが、近年は発達障害のある生徒を意識した手だてが必要となってきた。(例えば3年生の18名中13名は発達障害と診断されているという実態がある。)

今年度は「**発達障害のある生徒への具体的な支援の在り方**」をテーマにして研究活動をしてきた。2回の研究授業を通して明らかになったことは、まず第一に集団指導の形態で、**個々の生徒にとって分かりやすく活動しやすい場を展開するためには、分かりやすい共通ルールを取り入れることが効果的である**ことが明らかになった。分かりやすいルールとしては、ストレッチ運動などで**自分一人ではなくペアの生徒と協調した動きをすることや、集団行動ではマイルールではなく自分自身の動きをみんなに合わせる行動を優先する**などがあげられる。このようなルールの存在で発達障害のある生徒にとって、活動しやすい場が増えることにつながると考えられる。

第二には、ことばに加えて**視覚情報を多用した指導場面の展開**である。2年生の研究授業で**ビデオを使って、接客のハウツーを良い例と悪い例に分けて具体的な見本とすること**や実際の販売場面で使うと思われることばを「**接客基本トークマニュアル**」を生徒が身近において**活用すること**などがあげられる。

発達障害のある生徒への支援として、これらの事柄が有効と考えられるが、実はここで述べてきた手だては、発達障害のある生徒だけでなく他の生徒にとっても分かりやすく有効なものでもあることも忘れてはならない。

生徒にとってストレスの少ない快適な学習活動とするためにも、分かりやすくハードルが低くなるような手だては、特別支援教育を進めていく上では必要不可欠であると考えられる。

また、作業学習の在り方についての研究では、通学高等部を作り上げてきた教員から直接話を聞く場を今年度は設定することができた。開校当初から大切にしてきたことや作業学習の趣旨やねらいを再度振り返る機会として有意義であった。

本校の作業学習コースは「木工」「縫製」「窯業」の3コースであり、近年注目されている「メンテナンス」「福祉」などとは異なり、どちらかといえば古い作業コースと見られる場合も多い。しかし領域・教科を合わせた指導としての「作業学習」は作業コース内容にかかわらず、卒業後の就労につながるために必要な指導内容を精査し直すことで、大切な事項を作業学習の中で今後も伝えていきたいと考える。

さらに、最近の作業学習の全国的な傾向や流れを考えると、通学高等部の教育課程の中心基盤である作業学習をすすめるにあたっては、指導内容やそのねらいについての「易」「不易」を私たち教員が見分ける力を備える必要を再認識したところである。

4. 平成22年度の研究

(1) 22年度の研究概要

ア 作業学習参観

5月中旬に作業学習の授業参観週間(2週間)

イ 教育部研

作業学習の授業見学を受けて、通学高等部の作業学習の在り方を話し合った。

7月1日実施分

ウ 研究授業

2学期

1年生 自立活動「実習に向けたグループ別セッション」

中心指導者：野本恭寛、上田栄治郎、川勝奈美

エ A君の事例から学ぶ

(2) 研究授業を振り返って

2学期1年生研究授業「実習に向けたグループ別セッション」(H22/11/17)

題材の設定

- ・ 入学時より取り組んでいるリトレーニングは、本校に入学するまでに、間違っただけに身につけた社会的スキル(誤学習・マイルール)に気づかせ、正しいスキルを再学習させる場面を意図的に設定してきた。また、1年生の生徒一人ひとりのコミュニケーション能力をみてみると、自分自身の心理状態を理解し適切な言葉を選んで、自分の思いを伝えら

れる生徒が少ないうえに、他者との関わりもぎこちなく、相手の意図を理解しにくい状況がある。

- ・新学習指導要領で示された自立活動の内容にある6区分①健康の保持②心理的な安定③人間関係の形成④環境の把握⑤身体の動き⑥コミュニケーションの中から、1学年生徒の実態を鑑み、②心理的な安定③人間関係の形成⑥コミュニケーションの3つの内容に関わる内容を設定した。
- ・第1班は体を動かす活動を取り入れながら、コミュニケーションの基礎である「ほうれんそう」のうちの「報告」の活動を取り入れた。第2班は「ほうれんそう」のうちの「報告」「連絡」の活動を取り入れている。第3班は人間関係の形成をメインにした活動を取り入れた。

○ 発達障害のある生徒に対しての配慮

第1班

昨年度に引き続き、2人ペアでストレッチなどの活動をすることで他者との関係を意識したり、大人数で大縄跳びをすることをとおして関係調整をする場面を設定した。

また実際に体を動かしながら、指示通りにスピーディーに活動できる場面を設定して、簡単な報告ができるように配慮をした。

第2班

実習を意識して、作業指示内容に従い各種の仕分け作業を行った。不足分材料が出るように指示書を作り、その不足材料を取りに行く際に必要な「ほうれんそう」を適切に行うトレーニング内容となっている。実習に見立てて、正確に「報告」「連絡」ができるように報告内容と連絡内容の言葉を見ながらできるように配慮をした。

第3班

校内実習や現場実習を意識して、実際に起こりうるケースを想定して、適切なコミュニケーションがとれるようなトレーニング内容を用意した。会社に遅れるときの電話のかけ方や指示された内容に対する対応方法の実際を学べるように配慮した。

(3) 事例から

～1年生 A君のケース～

ア プロフィール

(ア) 学校医の診断より（平成22年5月の健康相談）

広汎性発達障害の診断については疑問もあるが、該当するとしたら、非定型自閉症と思われる。LD的な要因や場面緘黙の可能性もあり。いずれにせよ神経質で、ストレス場面で非常に緊張し、身体症状を呈しやすい特徴があり、対人面での思いこみの強さと、特に母子葛藤が強すぎる点が課題

本校に居場所を確保し、リラックスした状況で、安定した体調で登校できることがまず必要である。母子関係の安定は、本人が適応すれば自然に解決する可能性が高い。（「将来、両親に楽させてあげたい」の発言）それよりは、同じ学年、クラスの中で浮いてしまわないよう、SST的な取組をしたり、相手の行動やことばの真意を通訳してやりながら、自尊感情を育ててもらいたい。

(イ) 入学前の WISC-III より

VIQ: 89、PIQ: 101、FIQ: 94

言語理解91 知覚統合102 注意記憶88 処理速度97

a 言語性<動作性 有意差あり

b 「言語理解」学習達成度や論理的思考力は高い。音から違う言葉を想定したり、他者の心情理解の難しさ、現実場面での対応力の弱さが見える。

c 「注意記憶」耳からだけの情報では思考につなげることがやや困難。聞いたことの単純な入力はあるが、集中を持続させる力は弱い。

d 「知覚統合」視覚情報を手がかりに考えるのは得意だが、細部への気づきは弱い。状況把握では、独自の視点で自己流になり、見方を変えることに苦手あり。

e 「処理速度」見本があれば、単純に再生することはできるが、多くの情報から弁別するのはやや苦手。

◆ 独自の視点で見るため、状況把握や対人関係にズレが生じる可能性大で、SSTの必要あり。

◆ 固さや不器用さあり、作業学習では丁寧な手立てが必要

◆ パニック時のクールダウンも必要か？

イ 入学以降の様子（特徴的なことを中心に）

日付	行動記録
2010/05/14	作業中に返答がきつくなる。担任から振り返りの指導
2010/05/17	B、C、Dらにくるくる回れと言われてやった。気分悪い。部活中に気分悪い。保健室で1730まで寝る。駅まで送る。家庭連絡。家でも煮詰まってい
2010/06/08	連絡帳で母親訴え。本人と両親の間が近い。
2010/06/18	下校時に眉間に傷あり。家庭より連絡あり。
2010/06/21	金曜日下校時の事情を聞く。校門から国道までのあいだでこけた模様。家庭連絡
2010/06/26	E、Fとトラブル
2010/07/05	4日に京田辺で田圃でこけて自転車が用水路に 右膝切る。左親指脱臼か？ 通院のため病欠
2010/07/07	部活に行かずに、担任からの振り返り指導をする。足のけがのこと 通院のこと 部活の参加のこと
2010/07/18	30分程度家を飛び出したこと 事情を聞く
2010/07/27	7月23日より二階堂の祖父の家で過ごす。
2010/07/27	下校時に新祝園で下車する。好きな女子生徒の家付近まで行く。その後に二階堂へ
2010/07/28	27日の下校時のこと事情を聞く。担任指導
2010/08/22	平泳ぎ25m22"12 1位 自由型50m36"88 2位 全京都障害者スポーツ大会水泳の部 表彰
2010/08/31	好きな女子生徒IIに電話する。いつも仕切ろうとしているのでJが詰めるかもしれないとの情報流す。
2010/09/02	Gへの電話の件で事情を聞き指導する。
2010/09/12	障害者陸上大会400m 金メダル表彰 56"98 1位
2010/09/13	母親と電話連絡する。スポーツ紙のいかがわしい記事をカバンに入れて
2010/09/21	連休中に家で煮詰まる。担任面談
2010/09/30	1045両親来校。学年長・担任で懇談
2010/10/15	教室窓枠でぶら下がり、みんなから注意される。2回やってHに左手を蹴られる。電話連絡する。
2010/10/19	担任面談。振り返りでHとのことを整理する。
2010/10/21	20日家で両親ともめる。久御山マラソンの参加がきっかけ
2010/10/25	リハビリ病院通院 Dr. 母親本人担任
2010/11/09	930～リハビリ病院で脳波検査
2010/11/11	家でトラブル遅刻 遅れずにくる
2010/09/19	全京都障害者スポーツ大会陸上競技 400m 56"98 1位金 表彰
2011/11/22	宇治市障害者生活支援センター、京都府発達障害者支援センター、母親、学年長、担任でケース会議
2010/12/10	持久走大会表彰4位 56'00"

4月入学以降、学校への過剰適応の傾向があり、家庭内でもトラブルが続出

ウ 支援の経過など

(ア) 個別の指導計画より

就労に向けた目標	長期目標：(3年間)	就労や社会人として必要な社会的スキルを身につける。
	短期目標：(1年間)	思いこみや勘違いによるトラブル時に冷静に対応できる。
具体的課題		支援内容・手立て
<ul style="list-style-type: none"> 指示を確実に理解して丁寧に正確な作業をする。 場に応じた言動ができる。 		<ul style="list-style-type: none"> 作業工程や手順を視覚的にも理解し、確実に作業に取り組めるようにする。 パニック時、落ち着いてから自己の言動を振り返り、望ましい対応方法を具体的に学ぶ。
自立活動の区分・項目	具体的課題	支援内容・手立て
心理的な安定	情緒の安定	<ul style="list-style-type: none"> 思いこみ行動による対人不適応時に、個別に本人の思いを共感的に聞くとともに、状況説明を行う。

(イ) 個別の移行支援計画より

就労に向けた目標と課題	
長期目標 卒業後に向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 就労に必要な社会的スキルを身につける。 ・ 関係諸機関との連携により様々な支援体制を組む。
短期目標 1年間の目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 思いこみや混乱状況において、状況整理をし、適切な対人スキルを身に付ける。 ・ ストレスマネジメント力を身に付ける。 ・ 関係諸機関との連携状況を学校が把握する。

(ウ) 指導の実際（振り返りを中心に）

a. コミック会話をを用いた指導

11.11（木）の指導

- ・ 朝、時間ギリギリで登校する。理由を聞くと両親と朝からトラブルをおこした様子
- ・ 前日に友達と遊んでいるときに、ボールが川にはまって取った時に靴を汚したとのこと。
- ・ その靴を汚れたままで玄関に置いたために、両親にとがめられてトラブルとなった。

10.21（木）の指導

昨日、久御山マラソンの件で家でトラブル。母親に腕を掴む暴力。机を蹴る、物を投げる。振り返りをしてどうしたらよいか確認。楽しいことレベルを確認。母親 TEL 連絡。

これらの面談を実施して、担任による振り返りを行う。コミック会話をを用いて、順を追って説明すると、本人は状況の全体を把握して、両親が怒った理由が分かるようになった。

b. ソーシャルストーリーを用いた指導

入学当初より、フル回転で学校生活を送っていた A 君は、毎日学校で起こることが目新しく刺激が強いこともあり、家庭では疲れがひどく家族とのトラブルもよく起こっていた。

自分の体調を知ろう！！

2010年4月、君は、城陽養護学校に入学しました。入学してから2ヶ月が経ちましたが、作業学習や部活などを頑張り、学校生活にも少しずつ慣れてきました。これから、もっと学校生活を楽しみたいと思っています。

先生やお母さんも、君が毎日、体調良く、気分良く、楽しく活動できるように応援したいと思っています。

1年間を、楽しく活動するために一番大切なこと、それは毎日すっきりした気分ですごせるようにすることです。

すっきりした気分というのは、体調が良いことを指します。体調とは、「体の調子」のことです。

人間には誰でも、体の調子が良い時と、悪い時があります。調子の良い時は、どんな時でしょう？

調子の悪い時は、どんな時でしょう？

調子の良い時は、

調子の悪い時は、

「体調が悪い」ことは、決して悪いことではないのです。それを我慢せずに、「体調が悪いです。」と、周りの人に言えることの方が大事なのです。

そして、体調を良くするための対応ができるようになれば、「自分をコントロールできる大人」になれるでしょう。そうすれば、1年間を気分すっきり楽しくすごせるようになります。



そこで、自分の体調を管理できるように、ソーシャルストーリーを用いて体調を知るための指導をおこなった。

c. セルフチェック表などを活用して体調を知り、自分の活動を振り返る指導

自分の体調の変化を知るためと振り返ることで自分の活動を客観視できるように、一週間の動きを表にして記録する取組もはじめた。

・・・資料参照（[1週間セルフチェック](#)、[書き込み済み資料1・2](#)）

エ 保護者の不安に応える。(9月30日に両親来校。学年長と担任が対応)

(ア) 保護者からでたこと

本人の今後を心配

- ・ 過度の自尊感情を持ち、自信にあふれていること
- ・ 社会の価値観と本人の価値観のずれが大きいこと
- ・ 対人関係の狭さなど

在学中に、さらに将来を考えるとこれらの課題をクリアできるのか不安でたまらない。

(イ) 学校から話したこと

- a 校内での友人関係の様子を話す。
- b 将来像の展望を持ってもらうために今後の方針を伝える。
 - ・ 卒業後も将来的に家族以外の公的な支援が必要であること
 - ・ 実習で自分の力量を知ってもらうこと
 - ・ 人との距離感を適度に保つ必要性
 - ・ 適正な自尊感情を持ってもらうこと
 - ・ 卒業に向けての種々のスキルを身に付ける予定
 - ・ 福祉、行政等の担当者を集めてケース会議などを開き、望ましい支援の在り方を探る必要性あり。

オ 学校医へ受診

10.25 (月) リハビリセンター附属病院へ通院 (本人、母親、担任)

本人から家庭での悩みを話す。Dr.より母親にアドバイスあり。

- ・ 本人への障害告知を2年生になったら実施すること
- ・ ここ2年以内に療育手帳取得すること
- ・ 青年期に入った本人には、保護者や学校の先生ではなく、第三者機関(障害者生活支援センターなど)が本人の悩みを聞いて相談にのる態勢作りが必要であること
- ・ 母親の子離れも必要であること

カ 関係者ケース会議で

- ・ 日時：平成22年11月22日(月)16:00~17:30
- ・ 場所：山城北保健所綴喜分室 京都府発達障害者支援センター「はばたき」
- ・ ケース会議メンバー
宇治市障害者生活支援センター「そら」T氏、京都府発達障害者支援センター「はばたき」T氏、本人の母親、1年生学年長、担任
- ・ 内容
今回、主に家庭生活における、本人及び保護者(父親、母親)の困り感から、母親の申し出によりケース会議が設定された。本生徒の家庭での暴言や反抗的な態度がみられており、今後、地域で本人及び家庭をどのように支援していくのかについて具体的に討議された。内容は以下のとおりである。

- ◆ 行動特性による困り感がでてきた際に、「はばたき」の存在を示し、相談に来るよう促す。
- ◆ 高校2年時に、主治医より障害告知を行う予定である。その際、本人に様々な葛藤が生まれることが予想されるので、学校以外にも相談機関があることを紹介し、訪所するよう促す。→「はばたき」とはどのようなところか、本人にわかりやすく説明し、プラスのイメージをもてるよう指導することで、「はばたき」へのハードルを低くすることが大切であること
- ◆ 基本的に、「はばたき」では継続支援ができないので、各地域の支援センター(ういる、はびねす)で地域生活をサポートしていくことになる。
- ◆ 現在、療育手帳を取得できない状況であるが、ショートステイ等の福祉サービスの利用は可能である。家庭での生活で困難さがみられた際には、一時的に利用できることがわかり母親も安心されていた。
- ◆ 休日の余暇活動として、マラソンサークルに所属したり、スポーツジムへ通うなどして、家庭以外での居場所も作っていくべきであること

キ 2学期末での様子

- ・ 学校生活では、体調や気持ちをコントロールできる場面が少しずつ増えてきている。
- ・ 1学期のように過剰適応の傾向は少なくなっている。
- ・ 2学期になって顕著なことは、友達関係や家庭で困ったことがあれば、自分一人で判断せずに指導者に相談して欲しいとヘルプを出す場面が増えてきていることがあげられる。

5. 2年目のまとめ

平成 21 年度に引き続き、「発達障害のある生徒への具体的な支援の在り方」を研究テーマにして研究をすすめてきた。新しい学習指導要領では、自立活動の内容として 6 区分 26 項目が示されている。平成 22 年度は其中で 3 つ目の区分である人間関係の形成（他者との関わりや集団への参加）、6 つ目の区分コミュニケーション（状況に応じたコミュニケーション）に切り口にして研究をすすめた。

販売学習や校内実習、現場実習を題材にした授業で、具体的な場面（お客様とのやりとり・遅刻しそうなどの電話の仕方・実習中の「報連相」の仕方等）を想定して、生徒たちがどのように行動するのが望ましいのかを問うトレーニング場面を多く設定した。

その際に発達障害のある生徒に対しての手立てとして、第 1 にいくつかの行動パターンを提示して、望ましい行動パターンを選択する活動（選択肢を提示する支援）が有効であることが分かってきた。さらに電話でのハウツー問答などで、想定される問答パターンを提示してその中から望ましい話し方を選択する活動が、発達障害のある生徒にとって現実味のある活動となり、実際の実習場面で役立つ可能性は高いと考えられる。

第 2 に実習中の作業活動のなかで実際におこりやすい場面を想定して、望ましい「報連相」の内容を示し、生徒がそのフレーズを復唱することで「報連相」ができるようにした。このような定型のフレーズを復唱する活動自体、発達障害のある生徒にとって分かりやすい支援であると考えられる。生徒が実際の実習場面で『どのように報告したらいいか分からない。』『なにをしゃべったらいいか分からない。』ことにより、頭が真っ白になってじっと立ちつくす場面も減少し、作業そのものに集中できる環境がより整えられると考えられる。

また、ペアとのストレッチや大縄跳びのようにみんなで一緒になり体を動かす活動では、ペアと力を合わせてストレッチすることや縄の動きに合わせて跳ぶ行為自体が、集団への参加や他者との関係調整力を問われることになることが明らかになった。またペアによるストレッチや大縄跳び自体が分かりやすく参加しやすいので、活動そのものが手立てとなることも明らかになった。

最後に A 君の事例をとおして明らかになってきたこととして以下の点にまとめてみた。

(1) 本人への指導

- ・ 本人の周りでおこったこと事柄を整理して本人に伝えることが望ましい生活を送る上で有効であること。その際には、コミック会話やソーシャルストーリーなどを用いて指導すると、本人にとっても整理された情報として、きれいに取り込みやすくなること
- ・ 般化が困難なため、よく似たケースでも、事例をとおしていねいにフォローする必要があること
- ・ その際に自己肯定感を高めるような指導もあわせて行くと効果的であること

(2) 家庭への支援

- ・ 家庭内でのトラブルなどが生じている場合、時として保護者と本人の間に立って交通整理を行うと有効であること
- ・ 保護者に本人の将来像をイメージしてもらうために、卒業までの取組を伝えるとともに、卒業生の職業生活の様子なども伝えることが有効であること
- ・ 本人への支援が、家庭、学校に加えて公的な支援が受けられるような方向性を伝えると有効であること

(3) 医療との連携

隣接のリハビリテーション付属病院の Dr. が本校の学校医でもあることから、入学後の健康相談をその Dr. に依頼している。さらに保護者の了解を得て、必要ならばその Dr. に受診することで医療面からのアプローチも可能になる。

(4) 福祉関係者を交えたケース会議では

ケース会議を持つことで、本人及び家庭を包括的にサポートする体制を整えることができた。卒業後の支援の在り方を探るためにも、福祉関係者を交えた今回のようなケース会議を持ち、本人の困り感を大事にした支援の方向性を見いだすことは重要である。今後も個別の支援計画を精査して地域社会における支援の在り方を探ることが本人の社会参加につながると考える。